

ギルピン『ハイランド紀行』の森林観

Woodland Views in Gilpin's *Highlands*

今村 隆 男

Takao IMAMURA

2009年10月5日受理

1

18世紀半ば、風景美に目覚めたイギリス人は、大陸情勢の不安定さや国内道路網の改善を背景に、クロード・ロランらが描いたイタリア風景画に似た自然風景を国内に求めて旅に出るようになった。このピクチャレスク・ツーリズムの目的地として人気があったのはロンドンから遠く離れたイギリスのマージナルな地域であったが、その中で湖水地方やウェールズと並んで多くの観光客が訪れたのが、スコットランド、特に北部のハイランドや北西部の島々である。この地域に観光客を招いた要因としては、1760年以降に何度も版を重ねたオシアン(Ossian)の人気に加え、イングランド人には未知の地であったスコットランドを旅した先人達による紀行文の存在があったと考えられる。その代表的なものとして挙げられるのは、ジョンソン博士(Samuel Johnson)による『スコットランド西方諸島への旅』(*A Journey to the Western Islands of Scotland*, 1775)である。以後のスコットランド紀行は、ジョンソンのこの作品に対する反発や賛同など、その影響のもとに書かれていったと言てよいだろう。

『スコットランド西方諸島への旅』はスコットランドの野趣あふれる自然や文化の魅力を伝えているが、同時にイングランド人である作者の個人的印象を躊躇うことなく描き出している。その記述の中で、特に風景描写に関して注目すべき点は、スコットランドの土地の「不毛さ」に彼が驚きの目を向けていることであろう。木々の無い大地への言及はこの紀行文のあちこちに見出せるが、象徴的な例として、スコットランドにおける木はベニスにおける馬のように珍しいとジョンソンが述べている次の箇所を引用してみたい。

From the bank of the Tweed to St. Andrews I had never seen a single tree, which I did not believe to have grown up far within the present century. Now and then about a gentleman's house stands a small plantation, which in Scotch is called a *policy*, but of these there are few,

and those few all very young. The variety of sun and shade is here utterly unknown. There is no tree for either shelter or timber. The oak and the thorn is equally a stranger, and the whole country is extended in uniform nakedness, except that in the road between *Kirkaldy* and *Cowpar*, I passed for a few yards between two hedges. A tree might be a show in Scotland as a horse in Venice. (Johnson 15-16)

オークの木から山査子の茂みに至るまで木というものが見当たらないため、スコットランドには光と陰が織りなす風景の多様さが無いというジョンソンの表現は誇張したものであるとの印象を免れ得ないが、イングランドとの違いを彼が強く感じていたことは確かであろう。スコットランドの人々が将来の木材の供給を全く考えなかったからこのような「不毛さ」を招いたのだと、ジョンソンは続けて酷評する(Johnson 17)。彼の記述によれば、スコットランドの風景に見られるこのような傾向は、この一節が言及している南部の地域だけに限るものではなく、スコットランド全土に「同じような裸地」が広がっているというのである。

この旅行でジョンソンは、弟子のボズウェルを連れて1773年に西方の島々を目指した。彼らの行程は、エディンバラから海岸線を北上し、インバネスからネス湖を通してハイランドを横切り、スカイ島など西方の島々を訪れるというものであった。ジョンソンの描写は、主として彼がスコットランドで出会った風土や住人などの地域文化に向けられたものであったが、その客観的な描写にとどまることはなく、いわば「事実よりも所見」を重視するものであったと言える。その結果として、しばしば指摘されるように、ジョンソン自身のスコットランドに対する偏見が感じられる内容になっており、上記の引用箇所もイングランドと比べた場合のスコットランドの貧しさを強調したものであると言えるだろう。

スコットランドは1707年にイングランドと合同されたが、その後も争乱は続き、平和が訪れたのは1746年

の最後のジャコバイトの反乱の後であった。このような事情によって湖水地方よりはやや遅れたものの、1770年ごろからは多くのツーリストが訪れ始めるようになったが、この時期はピクチャレスク趣味の興隆期に重なる。スコットランドのピクチャレスク美を探求するツーリストにとって言わばバイブル的な存在になったのは、ギルピン(William Gilpin)によるスコットランド紀行であろう。ギルピンはジョンソンの3年後の1776年にスコットランドを訪れ、その10年余り後にピクチャレスク趣味の流行による要望の高まりに応じてその時の旅行記を『ハイランド紀行』(*Observations, Relative Chiefly to Picturesque Beauty, Made in the Year 1776, on Several Parts of Great Britain, Particularly the High-Lands of Scotland*, 1789)として出版した。彼は、そこでスコットランドの風景をどのように描き出しているのだろうか。本稿では、ジョンソンの言う「不毛さ」がギルピンの目にはどのように映っていたのかを中心にこの作品を検証し、ピクチャレスクの風景観やその背後にあった自然観を読み解く手がかりにしたい。

2

まず、『ハイランド紀行』におけるギルピンの旅程を確認しておきたい。作品全体はギルピンが当時住んでいたSurrey州のCheamを発着点とする構造になっているが、詳しく描かれているのは他のスコットランド紀行同様Edinburghから先である¹⁾。そこから彼はPerthを経てハイランドに入りDunkeldへ、西行してBlair、Taymouth、そしてInveracyへとハイランドを横断してゆく。第二巻はハイランドを抜けてLoch Lomondへ、そこからGlasgowを経由してスコットランドに別れを告げ、湖水地方を通って南下してCheamに戻るという行程である。スコットランド北東部の海岸線や西方の島々を精力的に回ったジョンソンとは異なり、ギルピンは当時人気の高かったハイランド中南部を十分な日数をかけて見て回った形になる。

それでは、ギルピンの行程をいくつかの地域に分け、その記述を辿ってみたい。

• Cheam—Edinburgh—Sterling

最初に言及されるのはロンドン郊外のEnfield-chaseであるが、ここを始めとして、当時一世を風靡していた造園家ケイパビリティ・ブラウン(Capability Brown)が仕事中のRoche-Abbey、それからAir河岸、スコットランドに入ってSelkirkと、まず行く先々でギルピンの目に留まっているのは、森林の伐採による景観の破壊である。Roche-Abbeyでは、単純な伐採批判ではなく、ブラウンがその土地が持つ特徴、即ちピクチャレスクの専門用語によれば「性格(character)」を無視し、全て一様な裸の風景に変えてしまっているこ

とが非難される。

He(=Mr. Brown) has already removed all the heaps of rubbish, which lay around; some of which were very ornamental; and very useful also, in uniting the two parts of the ruin. They give something too of more consequence to the whole, by discovering the vestiges of what once existed. Many of these scattered appendages also, through length of time, having been covered with earth, and adorned with wild brush-wood, had arisen up to the windows, and united the ruin to the soil, on which it stood.—All this is removed: ... (1 23)

視界にはいつくくる一つ一つのものの「特性(propriety)」とそれら全体の「調和(harmony)」の両方があるべき風景には必要であるとするのはピクチャレスク美学に共通する考え方であるが(1 24)、この「特性」と「調和」の法則に基づいて、雑草や低木などは「装飾」であると同時に、廃墟と地面を結びつける役割を果たすことによって風景全体の調和をもたらすという意見が述べられ、ブラウンがそれらを取り去ってしまったことが批判されている。ここでは、人の手で「上品に仕上げられた自然(polished nature)」ではなく、雑草などの茂る「放置(neglect、或はnegligence)」された「野趣(wildness)」溢れる風景をギルピンがより尊重していることは、見落とすことができない重要な点であろう(1 24)。自然は、人間が手を加えずに「放置」されたままであるべきで、人間ではなく「時間の経過」が本来作り上げてゆくものであるとするこの考えは、1790年代にはいつくくプライス(Uvedale Price)などによる環境保全的な考え方に引き継がれるものであると考えられる。

Esk川を渡るとスコットランドとイングランドの国境を越えたことになるが、その際にギルピンは両国の抗争の歴史に思いを馳せ、この地に平和が訪れた自らの時代に感謝する一方で、海外では何故、戦争はなくならず、黒人奴隷貿易も含めたイングランドの野蛮行為は許されているのかと問うている。しかし、グレニアが指摘しているように、統一国家の形成による平和はスコットランドのイングランド化に結びつくものでもあり、特にイングランド化される前の奥地のハイランドを見ておきたいという願望が、この地へのツーリズムの流行の背景にあったことも確認しておく必要があるだろう(Grenier 15-18)。

Edinburghを過ぎてギルピンはハイランドの入り口の町Sterlingに向かうが、その途中Carron川付近では大規模なコークス工場に注目し、それは「地獄」のイメージを与えると表現している。ギルピンは、Wye河

畔の石炭工場や湖水地方Borrowdaleの黒鉛工場を描く際には、その詳細には触れずに遠方からピクチャレスクの風景美の一部としてこれらの工場の建物を扱っているが、一方、ここで彼はコークス工場の近くまで行って具に観察し、想像を絶するその火、煙、騒音などに驚きの目を向けている。近景の詳細よりも遠景にこだわるピクチャレスク趣味は、対象たる風景の現実を見ない、即ち、実際にその土地で進行していた近代化の醜い側面を隠蔽するものであったとする、バーミンガム(Ann Bermingham)に始まる批判的見解は耳を傾けるに値すると思われるが、ここでのギルピンの態度は、その定型的なピクチャレスク評から踏み出す一面を持っていると言ってよいだろう。

• Dunkeld—Blair

Sterlingを通してハイランドに向かうと、KinnoulやAtholといった貴族による針葉樹の大規模な植林や、森が完全に無くなってしまったBirnamの丘の景観などに目に留まっている。ハイランドでの最初の訪問地Dunkeldでは、Athol公爵が滝を見るために建てた有名なHermitageをギルピンは見学している²⁾。

A considerable part of the ground along it's [its] course the duke has inclosed : but his improvements are not suitable to the scene. Nothing was required but a simple path to shew in the most advantageous manner the different appearances of the river, which is uncommonly wild, and beautiful ; and should have been the only object of attention. In adorning such a path, the native forest wood, and natural brush of the place had been sufficient. Instead of this, the path, which winds among fragments of rock, is decorated with knots of shrubs and flowers. (1 119-20)

「囲い込み」が行われて「土地改良(improvements)」が行われたこの場所は、「もともとあった森や自然のやぶ」がその風景には「ふさわしい」ものであったにも拘らず、それらを切り開いて幾何学模様の花壇で飾り立てるなど、人工的な要素が今では強すぎるとギルピンは言う。滝そのものには「非常に高いレヴェルのピクチャレスク美」を彼は見出すものの、とりわけ、よりピクチャレスクな風景に変えて見る目的で窓に赤や緑の色ガラスを入れたこの建物は、「飾り立てすぎ」で「隠者の隠れ家という」その名前に似つかわしくない」とも切り捨てる(1 122-23)。そして、人がどのような手段を使ったとしても「自然そのものの美しさにはかなわない(1 124)」と締めくくる。デューリーによれば、このHermitageは近代的な観光システムを初め

て取り入れた場所で、バッジを付けたガイドがおり、花束などのおみやげ等も売られていたという。スコットランドの他の観光地において、すでに落書きが多かったことや記名帳があったことなどと共に、デューリーは観光客の増加の証拠としてHermitageに言及している(Durie 24-25)。ギルピンの感じたこの場所への不快感は、自然の田園風景を理想とするピクチャレスクの考え方は、近代化の一側面としてのあからさまな観光化とは相容れないものであったことを示していると言えるだろう。

次のBlair城では、ギルピンが最も賞賛しているのは雷鳥などの鳥類の豊富な、樅を始めとする木々のなす広い森である。この針葉樹の植林の森は、Atholがバーンズ(Robert Burns)の詩から着想を得ながらも、その「そびえ立つ木々(tow'ring trees)」は落葉松や樅だろうという勝手なイメージによって作ったもので(Andrews 218)、ギルピンはそれまでの旅程で最もピクチャレスクだとしているが、『湖水地方案内』の中で外来種の植林を痛烈に批判していることで知られるワーズワス(William Wordsworth)と妹のドロシー(Dorothy)は、1803年にここを訪れた際、これらの植林の木はスコットランドの固有種の樺やトネリコ、ナナカマドであって欲しかったと述べている。ギルピンの描写にはワーズワス兄妹のような生態系への視点は認められない。しかし、この広大な領地に領主のAtholが施した「土地改良」の持つ人工的側面に対して、全体としてはギルピンも批判的であると言えるだろう。

• Loch Tay—Inverary

BlairからLoch Tayを経て、小船による湖の周遊を楽しんだりしながら、ギルピンは西南に向けて進む。その間、各地の城の歴史や「(風景画における)構成の規則(rules of composition)」を尊重すべきだという典型的なピクチャレスクの構図重視の水彩画論、ジョンソンも言及していたアメリカへの移民のエピソードなどを交えながら、ギルピンは相変わらず木々の少ない単調な荒野の風景(“All was wide, waste and rude” 1 171-72)の中を抜けてゆき、ハイランド最後の訪問地Inveraryに至る。

Inveraryは、城主である貴族が理想的な風景を作るために「土地改良」を施した場所であると紹介されるが、中でも強調されるのが城と湖との間にあった村全体の移動の話題で、城から見ることでできる景観を損なうものとされた「汚い」村をやや離れた場所にまると移したことを、ギルピンは支持する立場から解説しているのが注目される(1 186-87)。移築後も部分的に城からの視界を遮ることになってしまったのは、この貴族が村人達の「利益」にも少しは配慮した結果であるとギルピンは擁護しているが、ここには、ありのままの風景よりも修正した風景に引かれるギルピンの

風景観の一面が顔を覗かせていると言えるだろう。

• Loch Lomond—Glasgow—Cheam

ここから第二巻にはいる。「美しい」Inveraryをあとにして、再び木のない単調な景観の中を通過して、ギルピンは「スコットランドで最も有名な湖」であるLoch Lomondに向かう。その途中では、山々の描き方や色彩の調和などといったスケッチの方法や、好ましい風景と木々との関係など、絵画的観点からの風景論が挿入されている。Loch Lomondでは、湖面からボートに乗って見える山々の色彩や形についての議論が行われるが、それよりも湖内の島々に住むミサゴやサケなどの動物についての博物誌的な関心からの話が興味深い(2 27, 37)。ピクチャレスク流行の時代は、博物誌への関心が高まった時期でもある。ここには、ジョンソンの数年前にスコットランドを訪れた博物学者ペナントの『スコットランドの旅』(*A Tour in Scotland 1769*, 1771)の影響が考えられるだろう。ピクチャレスクの隆盛を招いたのは自然への関心の増大であり、それは身近な自然を観察することで自然の仕組みを知ろうとする博物誌の隆盛と時期を同じくするものであったことは当然であるだろう。

続いてギルピンはDunbarton城を訪れ、この城が建てられている大きな岩山について解説しているが、そこでは、その岩の不思議な形を説明するために地表の岩石が形成されてゆく「自然全体のプロセス(nature's whole process)」に言及している点が注目される(2 45)。「自然のプロセス」という言葉は、こののちバーク(Edmund Burke)の『フランス革命についての省察』(*Reflections on the Revolution in France, and on the Proceedings in Certain Societies in London Relative to that Event. In a letter Intended to Have Been sent to a gentleman in Paris*, 1790)やプライスの『ピクチャレスク論』(*An Essay on the Picturesque, as Compared with the Sublime and the Beautiful; and, on the Use of Studying Pictures, for the Purpose of Improving Real Landscape*, 1794)の中にも現れ、それを受け継いだワーズワスが『湖水地方案内』(*Guide to the Lakes*, 1810-35)の中で、外来種の植林は「自然のプロセス」に反すると批判した際に使われる、近代的自然観の萌芽に結びついてゆくことになる表現の一例である³⁾。

さらにギルピンは、その岩の表面に付着する地衣類について次のように解説する。

The upper regions of the rock are profusely covered with the lichen geographicus—, which is one of the most beautiful of all vegetable incrustations. I doubt not, but these plants of

the lichen kind, tho they do not in appearance rise above the surface of the stone, have their peculiar soils, barren as we may esteem them, as well as oaks, or elms. One loves a free-stone—another a purbeck—and the species before us, I am persuaded from many situations in which I have seen it, flourishes best on the hardest rock. (2 47-48)

ギルピンはまず外観に注目して、その地衣類を風景美を支える装飾物として捉え、表面を覆う植物の中では最も美しいと説明する。しかし、そのあと彼はオークや榆の木と同じように、地衣類も各々に適合した土壌があり、このような固い岩の表面ではこの地衣類が最も育ちやすいと述べている。ここには、本来その植物が育つべき場所に育っている場合、その植物が最も周囲の風景に調和した美観を有することにもつながるといふ、『湖水地方案内』で展開されることになる風景美と環境を連関させるワーズワスの捉え方が根底にあると考えられる。

Dunbartonに続いて訪れた大都市Glasgowの描写はごくわずかで、そこからギルピンは東進してDrumlanrigへ至り、その近くの滝の説明や周囲に存在する鉛の鉱山に言及する。そこではCarron川のークス工場に言及した部分と同様に、鉱山がもたらす健康被害などが取り上げられて批判的に説明されている(2 76-77)。そのあと、「人間の技術(art)」が回復不可能なほど「土地改良」ではなく本当の「改悪(deforming)」によって自然を破壊してしまったQueensberry-houseの例に触れ、「人間の技術」よりも「自然」の方が勝っているべきことをギルピンは強調する(2 83-85)。ギルピンの眼前にある惨い現状をもたらした領主とは対照的に、Queensberry-houseの先代は領民の生活をも深く配慮した慈愛に溢れた領主の希有の例と絶賛されている⁴⁾。この人物は、のちに牧師としてのギルピンが出版する説教的作品『モラル・コントラスト』(*Moral contrasts: or, the power of religion exemplified under different characters*, 1798)に登場する理想的な主人公ウィロウヴィのモデルではないかと想像できるのであるが、上下関係を前提とした調和と秩序を支えるギルピンの理想的社会観をここに読み取ることも不可能ではないだろう(2 94-95)。

帰路ギルピンは、スコットランドとイングランドの国境にある、駆け落ちの地として有名なGretna-greenを経て、前回の湖水地方への旅行で立ち寄りなかつた地域を通過してサリーの自宅へと帰った。湖水地方においては、ギルピンは自ら「Keswickの湖」、即ちダーウェント湖を「土地改良」する提案を行っている(2 161-67)。そこで、行く先々で所有者の「土地改良」に多くの場合批判的な意見を述べているギルピン自身

は、どのような改良案を持っていたのかをここで一瞥しておきたい。彼が提案しているのは、主として次の2つの点である。まず、現状では道路事情のせいで湖の美しさを半分しか楽しめないのが、風景美を満喫できる道路の整備が必要だという点である。これは馬車道ではないとしているので、徒歩で風景の探求をすることが肝要であると彼は考えていたことがわかる。ここに、距離を隔てて風景の構成にこだわるという、一般的に言われているピクチャレスク趣味の持つ風景画的視点から、歩行によって自然の中に入って行って交わろうとする姿勢へという変化の一端が認められることも不可能ではないだろう⁵⁾。

次にギルピンは、風景美を楽しむために景観の中にあつて「汚点(deformities)」となるものは取り除くことを薦める。何が「汚点」であるかということを判断するのは難しいとしながらも、ギルピンは次のように続ける。

And here I should perhaps find a difficulty in settling with many people, what was a deformity. In nature's works there is seldom any deformity. Rough knolls, and rocks, and broken ground, are of the very essence of beautiful landscape. It is man with his utensils, who prints the mark of deformity on Nature's works. Almost every thing in which he is concerned, I should wish to remove. (2 163)

基本的な考え方として、自然の造った作品には本来、欠点はなく、「汚点」をつけるのは人間の行為であり、それらは悉く取り除くべきだ、という信念がここには確認できる。しかし、このあとギルピンは、理想的な風景美を追求する観点から、次のようにも主張する。

But notwithstanding the beauties of nature, it may happen that some deformities, even in her operations may exist.... An awkward knoll, on the foreground may offend; which art may remove, or at least correct. It may remove also bushes and rough underwood; which, tho often picturesque, are yet sometimes in the way. It may remove also a tree or a clump, which may have placed themselves between the eye, and some beautiful part of the scene. (2 163-64)

風景美を観照する上で障害となるものは「汚点」であり、その中には前景に存在する、即ち目障りになる「不格好な小山」や低木や下草などが含まれる。それゆえ、場合によってはそれらのものを人間の力で「取り除く」

ことや「訂正する」ことも控えるべきではない。その一方で、彼は植林を薦めている。芝生や雑草などよりも「最も豊かな(風景の)装飾」は木々であり、風景を飾ると同時に風景の「汚点」を隠す役目を併せ持つ植林は、多いに推進されるべきであると説く。美を創造する自然の力を「人間の技術」はしのぐことはできないので、植林したての木々の外観は未だ不十分なものであるが、いずれ時間の経過と共に木々はピクチャレスクな風景を形作ってゆく(2 164-66)。雑草の除去の推奨など、「場合によっては」という条件が付けられているものの、これらの提案はギルピンの唱導する理想的風景の人工性が前面に出たものになっており、この紀行文において各地での実際の風景に見出せる「自然」状態をより尊重する視点からの彼の意見とは、ややその力点が異なっているような印象を免れない。ここには、絵画的視点からの「人工」とあるがままの「自然」の尊重との間で揺れるギルピンの風景観の両義性を読み取るべきであろう。

3

スコットランドを抜けてから次の訪問地である湖水地方の記述に入る前のかんりのページを裂いて、即ちセクションにして32から36までにおいて、ギルピンはスコットランドの風景の総括を行っている。そこで、この部分に読み取れる彼の風景観を検証しておきたい。

ギルピンは、スコットランドの風景が持つ大きな特徴を二つ挙げている。その特徴の第一は、スコットランドにおいては「広大な土地の広がり」が「完全に自然の状態に(intirely in a state of nature)」置かれていることである。彼によれば、スコットランドではどこまで見渡しても人間の手になる「境界」というものをみかけることはなく、「全ては無限(unbound)」で広大である(2 111-12)。直線的な「境界」以上に「風景の汚点」となるものはあり得ないため、スコットランドの大地は「自然本来の衣」をまとっているがゆえに、見る者には「喜ばしい光景」となる。

Could we see her in her native attire, what delightful scenery should we have! Tho we might, now and then, wish to remove a redundancy(for she is infinitely exuberant in all her operations)yet the noble style in which she works, the grandeur of her ideas, and the variety and wildness of her composition, could not fail to rouse the imagination, and inspire us with infinite delight. (2 113)

「荘厳さ(grandeur)」と「多様性」、そして「野趣(wildness)」に溢れたその風景は、想像力を刺激し、無

限の喜びで見る者を感動させる。これが、スコットランドの風景の特徴なのである。

これとは反対に、風景内にある「もの(objects)」の欠乏から来る「風景の貧困」が、スコットランドの風景の第二の特徴であるとされる(2 117-19)。本来、風景は「自然の豊かさ(richness)」と「人工的な豊かさ」の両方の「豊かさ」から成り立つべきものであり、前者は木々の織りなす多様な「色合い」や「光」によって支えられ、後者は家々、橋、廃墟、などによって作り上げられていると、ギルピンは持論を展開する。即ち、理想的な風景には、「自然」と「人工」のバランスが必要なのである。そして、スコットランドの風景においては、広大さの一方で、「豊かさ」を付与する木々や建築物の両方もが不足しているのである。

スコットランドではこの両者のうち、特に木が少ないとギルピンは言うが、この指摘はジョンソンと全く同じである。しかしながら、ギルピンはスコットランドの木々の詳細を語ることによって、ジョンソンとは異なる見解を持ち出す。ジョンソンの「所見」は欠点ばかりを挙げて長所を無視する「ひねくれ(peevishness)」たものであるとして(2 119)、ギルピンはジョンソンの紀行文の中の次の箇所を引用する。

They [=the hills (of Scotland)] exhibit very little variety ; being almost wholly covered with dark heath, and even that seems to be checked in its growth. What is not heath is nakedness, a little diversified by now and then a stream rushing down the steep. An eye accustomed to flowery pastures and waving harvests is astonished and repelled by this wide extent of hopeless sterility. The appearance is that of matter incapable of form or usefulness, dismissed by nature from her care and disinherited of her favours, left in its original elemental state, or quickened only with one sullen power of useless vegetation. (Johnson 84)

スコットランドの丘は、発育不足のヒースとわずかばかりの急流以外は何もない「裸地」同然だというジョンソンの説明に対して、それは彼が花咲く牧場や麦穂の実る光景だけが「風景美(the beauties of landscape)」の源であると考えているからであるとギルピンは批判する。ここには、「自然の中にある偉大で崇高なるもの(the great and sublime in nature)」には関心を示さずに、「有用性」の認められる風景の「美」だけに価値を見出そうとする古典主義的な風景観と決別しようとする、ギルピンの姿勢が読み取れる(2 120-21)⁹⁾。

その上で、ギルピンはスコットランドの風景美を冷

静に分析してその魅力を見出すことで、ジョンソンに反論する。その要点は、まず第一に、スコットランドの風景には、上記のスコットランドの風景が有する第一の特徴である「無限さ」と関連して、イングランドにはない「崇高(sublime)さ」や「壮大(grand)さ」、或は「陰鬱(gloomy)さ」、「哀愁(melancholy)」など、いずれもピクチャレスクの理想的風景を成り立たせる要素が見出せるにも拘らず、ジョンソンはこれらを評価していないことである。

第二は、風景内の木々に関わる問題である。ギルピンは今回の旅行における自らの観察に基づき、スコットランドには古木が殆どないことを認めつつも、次のように主張する。即ち、スコットランドには固有種である樅やトウヒや松は少なくなく、これらを中心にした植林の森は今はまだ若木が多く自然林が持つべき美しさを有していないが、時間がたてばいずれピクチャレスク美を形成するであろうと言う⁷⁾。一方で落葉樹はどうかと言えば、これらの常緑の針葉樹よりは圧倒的に数は少ないものの、「ピクチャレスクな木」であるとされる落葉松や樺は「あちらこちらで」見出せるという。

Here, and there we see the larch, and the birch ; both of which flourish ; and both of which are picturesque. But tho the nobler trees, as we observed, rarely occur ; yet when we see them thrive in many parts, particularly about Dunkeld, Inverary, Taymouth, Hamilton, and Hopeton-house, we cannot but suppose the country is in general as well adapted to foster them, as the pine ; and that the nakedness of Scotland in this respect, is more owing to the inattention of the lords of the foil, than to any thing forbidding either in the foil itself ; or in the climate. (2 125)

樺の木については、19世紀にはいつてからの旅行記においてドロシー・ワーズワスは、湖水地方と同様にスコットランドの固有種でもあると述べており、一方、落葉松については、兄のウィリアムが湖水地方においては周囲と美的に調和しないと痛烈に攻撃した外来種であることはよく知られている。ここでは、ギルピンが両者ともスコットランドの土地に適合したものであるとしているのが目を引くが、花粉の化石の調査がワーズワスの主張の正しさを証明している現代とは異なり、この時代にあっては、両者を区別するのは難しかったことをギルピンの記述は示しているのではないかと推測できる。

それよりもこの引用文で重要なことは、ギルピンが全体としてスコットランドに木々が少ない原因を、そ

の気候や土壌の側の問題よりもむしろ、地主がそれらに配慮しないで外来種を植えるからであるという原因に帰していることであろう。そして、その気候や土壌に適合しているのはスコットランドの固有種の松や樅であり、オークが見当たらないというイングランドの基準でスコットランドの風景を評価すべきではないとする。松とオークとは、次のように比較・分析されている。

Besides, in Scotland winter reigns three parts of the year. The oak protrudes it's [its] foliage late; and is in that climate, early disrobed. The pine is certainly a more cheerful; and a more sheltering winter-plant; and of course not only better adapted to the *scene*, but to the *climate* also. (2 126)

スコットランドでは、一年の四分の三は冬なので、オークが葉を茂らせている期間は短く、常緑の松の方が「気分を明るく(cheerful)」してくれるし、またその常緑の葉はより小さな冬の植物を守ってくれるもする。即ち、固有種の木の方が、風景にも気候・風土にも適合することなのである。ここには、地域の環境をも考慮した、現代にも繋がる自然観が認められると言ってよいのではないだろうか。その上で、イングランドかスコットランドか、どちらかが風景美の点で勝っていると判断できるわけではないと、ギルピンは結論を出している。

4

ハイランドの中では最後の訪問地となったInveraryの城を離れるにあたって、ギルピンはハイランドの旅を振り返り、その風景や住人のマナーに多に満足したことを表明している。そして、かつてのハイランドの氏族(Clans)同士の醜い争いの例を詳しく挙げながら、Cullodenの戦いのあと急速にハイランドは、イングランドの好ましい影響力によって野蛮な状態を脱して文明化された土地へと変わってきていると述べている(1 188-215)。しかし、このような見方が、ピクチャレスクが理想として追求しているのが近代化以前の風景であることと矛盾することに、ギルピン自身は気づいていないようにも感じられる。いわゆるピクチャレスク・ツアーとは、本来、近代化、文明化されていない自然の風景を求めて、イギリスのマージナルな地域を目指すものであったはずである。国内各地の中でもスコットランド、特にハイランドや西方の島々は近代化の遅れていた地域であり、ギルピンがその風景の特徴としていた崇高さや広大さは、不毛=非・有用性、野蛮=非・文明、非・観光化、といった価値観と不可分のものであった。ところが一方で、ピクチャレスク

の理想的風景は、劇場に比した構図を重視し、廃墟などの人工的装飾物を歓迎するという反・自然に与する側面をも併せ持つ。『ハイランド紀行』が書かれたのは、その少し前にバークの『崇高と美の観念の起原』(*A Philosophical Inquiry into the origin of Our Ideas of the Sublime and Beautiful*, 1757)が世に出、自然体験に依拠する感覚的「崇高」や「美」への関心が非常に高まっていた時期である。『ハイランド紀行』でギルピンが「崇高」を強調している背景には、バークのこの書の存在があることは間違いないだろう。ところが、ギルピンは「ピクチャレスク美」という美学的には曖昧な表現を使っていることから明らかなように、「崇高」と「美」との区別を厳然と行っていたとは言いがたい。これら両者と「ピクチャレスク」、三者の分類的定義が行われるのは、1790年代のプライスらによってである。風景の「人工」的要素よりも「自然」の状態を常に優先しながらも、場合によっては人の手による風景の修正が必要であるとするギルピンの風景観にみられる両義的性格は、「崇高」と「美」との間で揺れだした初期のピクチャレスクの風景観の時代性を映し出していると言えるのではないだろうか。

Notes

- 1) 『ハイランド紀行』で言及されている地名・人名については、ギルピンの表記に従った。従って、現在の通常の表記とは異なるものもある。
- 2) この“Hermitage”はのちに“Ossian's Hall”と改名されたように、その観光商品化の意図は明らかである。この建物の詳細については、アンドリュースが詳しい(Andrews 213-7)。この建築物は現在、ウィンダーミア湖西岸にあって、色ガラスを通して風景を見るための窓のつけられていたクライフ・ステーション同様、National Trust (of Scotland)が所有・保存している。これらの色付き窓ガラスは、機能としては当時の観光客の必需品であったクロード・グラスに嵌め込まれた色付きの鏡に似ているが、この同じセクションの文章の中でギルピンは両者をはっきりと区別し、本物のピクチャレスクの風景が見られるのはクロード・グラスだけだと述べている。クライフ・ステーションについては、拙論「風景と想像力—ウィンダーミア湖畔のクライフ・ステーションをめぐる—」(『和歌山大学教育学部紀要—人文科学—』第57集 2007年) 参照。
- 3) 「自然のプロセス」については、拙論「ピクチャレスクとアナロジー—紀行文・風景論にみられる森林観」(要田他編『英文学の地平—テキスト・人間・文化—』2009年) 参照。
- 4) 先代のQueensberry公爵は、領民たちのために自らの城から見える所に快適な住居を建てるなど、「慈愛と寛大さ、改良心と公益への配慮」を持ち合わせた人物であったとされているが、これは『モラル・コントラスト』のウィロウヴィ像に非常に近い。拙論「ギルピン『モラル・コントラスト』における「モラル」」(『和歌山大学教育学部紀要—人文科学—』第59集 2009年) 参照。
- 5) ピクチャレスク時代の次のロマン派の時代に歩行が持つようになった意義については、ウォレス(Anne D. Wallace)やジャービス(Robin Jarvis)らの研究が詳しい。
- 6) ギルピンは、山もまた「自然のシステム」の中で有用性を

持っているとし、注釈で参考文献としてダーラム(W. Derham)の書の名前を挙げているが、具体性がない(2120-21)。

- 7) ギルピンは、トウヒの木の形を「ピラミッド状に尖っている (spiring in a pyramidal form)」と肯定的に表現しているが(2124)、のちにフランス革命が始まるとプライスやワーズワスは、針葉樹の同じ形状をフランスの軍隊の槍のように醜いと酷評する。

Works Cited

- Andrews, Malcolm. *The Search for the Picturesque : Landscape Aesthetics and Tourism in Britain, 1769-1800*. Aldershot : Scolar Press, 1989.
- Durie, Alastair J. *Scotland for the Holidays : Tourism in Scotland c 1780-1939*. East Lothian : Tuckwell Press, 2003.
- Gilpin, William. *Moral Contrasts : or, The Power of Religion Exemplified under Different Characters*. Lymington : J. B. Butter, 1798.
- . *Observations, Relative Chiefly to Picturesque Beauty, Made in the Year 1776, on Several Parts of Great Britain, Particularly the High-Lands of Scotland*. 2

- vols. London : R. Blamire, 1789.
- Grenier, Katherine Haldane. *Tourism and Identity in Scotland, 1770-1914 : Creating Caledonia*. Aldershot : Ashgate, 2005.
- Jarvis, Robin. *Romantic Writing and Pedestrian Travel*. London : Macmillan, 1997.
- Johnson, Samuel. *A Journey to the Western Islands of Scotland*. London : printed for W. Strahan ; and T. Cadell, 1775.
- Pennant, Thomas. *A Tour in Scotland 1769*. Chester : Printed by John Monk, 1771.
- . *A Tour in Scotland, and Voyage to the Hebrides : 1772*. Chester : Printed by John Monk, 1774-1776.
- Wallace, Anne D. *Walking, Literature, and English Culture : The Origins and Uses of Peripatetic in the Nineteenth Century*. Oxford : Clarendon Press, 1993.
- Wordsworth, Dorothy. *Recollections of a Tour Made in Scotland A. D. 1803*. Ed. J. C. Shairp. Edinburgh : Edmonston and Douglas, 1874.
- Wordsworth, William. *Guide to the Lakes. The Fifth Edition*. Ed. E. de Selincourt. 1835. Oxford : Oxford University Press, 1977.